

# 関西釣り文化を探る (第3回)

佐々木 洋三

## 鯛ラバ釣りのルーツを求めて

真鯛が棲息する北限の津軽海峡から南限の屋久島まで、全国各地で人気沸騰の「鯛ラバ釣り」。釣り方は簡単で、餌をつけずに疑似餌を海底まで落としてただ巻き取るだけ、はじめて釣りをする女性や子どもでも手軽に百魚の王と崇められる真鯛を手にするのが魅力です。この疑似餌、ブラックバス釣りのルアー「ラバージグ」に似ていることから、真鯛のラバージグを略して「鯛ラバ」と呼ばれるようになりました。

私をはじめこの鯛ラバ釣りに出会ったのは、今から15年前の鳴門でした。当時、「鯛は海老で釣るもの」と相場が決まっていたから、餌をつけないこの疑似餌釣りとの出会いは衝撃でした。しかも餌を食い千切る「餌取り」に邪魔をされることも少なく、本命だけを効率良く狙う漁具だったのです。漁師は鉛を打った「ビシマ糸」を用いて軽い疑似餌を海底に沈める手繰り釣りでした。われわれは細くて強いハイテク素材のPEライン(ポリエチレン製の釣糸)をリールで巻き取る釣りを編み出し、広く提案しました。かくして「鯛ラバ」を落とし、ハンドルを巻くだけという簡単な操作で、誰もが鯛釣りを楽しむことができるようになったのです。真鯛の他にも、マハタやガシラ(カサゴ)、アコウ、ホウボウなどの根魚に加え、マゴチ、タチウオ、スズキ、ブリなどの高級魚まで釣れることがわかりました。

### 「鯛立て釣り用擬餌釣」

この疑似餌による鯛釣りの発祥を辿る貴重な文献を見つけることができました。朝日新聞社の記者で釣魚欄を担当していた松崎明治氏が昭和17年に著した名著『釣技百科』(朝日新聞社)です。松崎氏によればこの疑似餌釣りの発祥地は、関アジ・関サバで知られる大分県の佐賀関でした。当時は「鯛立て釣り用擬餌釣」と呼んでいたようで、昭和の初頭に関東の釣り師もこの疑似餌釣りに憧れていたことが次のように記されています(原文は旧仮名遣い)。

鯛擬餌の発祥については、各地でいろいろ先陣争いや元祖争いが喧伝されているが、現今の瀬戸内海の西南端大分県佐賀関漁師に使用され、各地の鯛仲間によく話題になる海藻「ウミトラノヲ」については、大正三年八月発行の水産研究誌第九巻第八号に明治末期に創案された旨の興味ある報告が残されている。(中略)四、五年前(大正三年より)大分県北海部郡佐賀関町字須賀の漁夫、黒岩國松なるもの鯛一本釣の為、近海に出漁中、たまたま餌料(小蝦 コエビ)の欠乏を告げ、当惑の折から、応急手段として有り合わせの「ウミトラノヲ(方言は

タコ藻)」を鉤に装餌し(佐賀関地方では小蝦を漁船の活間(イケマ)に蓄えるのに「ウミトラノヲ」等の海藻をともに入れ置く常習があった)釣りを試みたるに意外にも鯛の掛かり宜しく、小蝦と



名著『釣技百科』(昭和17年10月 朝日新聞社発行)朝日新聞記者で釣魚欄を担当していた松崎明治さんが著したもの



現代の鯛釣りの疑似餌「鯛ラバ」

ほとんど変りなき漁獲があった。以来黒岩氏はこの漁のことを秘密に行ってきたが、同人の漁獲高が常に他に優り、しかもいつも別段餌を購入する模様がないたため、遂に彼は他人の飼料を窃取するにあらずとの嫌疑を受けることになった。また、同業者の間で彼の漁法を怪しんで、これを探知しようと努めるものがあり、いつとなく多数に伝搬し各自内密に使用し、彼の死後一般に発表するに至った(黒岩國松氏大正三年六月三日暴風雨の時近海出漁中遭難溺死)。

さらに本誌125号で紹介した「テグス行商船」がこの釣りを瀬戸内海沿岸の各漁港や和歌山の加太へ伝え、そこから雑賀の漁師が東海から関東まで伝播したのです。



「鯛立て釣り用擬餌釣」  
当時はこんな擬餌釣が使われていた(釣技百科より)

### 黒岩國松氏の足跡を辿って

この本を貪り読み、明治時代にカブラに海藻をつけ、疑似餌でマダイを釣った黒岩國松名人の足跡を訪ね、佐賀関を訪れました。佐賀関漁協に伺い、地元で名人と呼ばれる鯛の一本釣り漁師を紹介してもらった機会を頂いたのです。黒岩國松さんのことを伺うと「その名前は親父から聞いたことがある。かなりの名人だった」といいます。佐賀関は江戸時代より真鯛の好漁場として名高く、早い潮流を利用して、活魚を大阪の雑魚場に卸したことで有名です。

佐賀関大分支所には、当時の「関の一本釣り船」を復元した小舟が展示されていました(写真)。黒岩國松名人もこんな小舟で漁場まで漕ぎ出したと思いますが、佐賀関灯台沖は轟々と潮が流れる海域です。一度、海が荒れば、命がけの操業だったことが分かります。かくして一本釣り漁師が編み出した和製ルアー釣りは、海を隔てた韓国でも大きなブームになりつつあります。釣りは日本が誇る貴重な文化です。一本釣り漁師の創意工夫から生まれた日本の釣り文化、釣魚料理など、関西には埋もれた文化資源がまだまだ残されています。



轟々と激流が流れる佐賀関に漕ぎ出した当時の舟  
命懸けであったことがわかる



佐賀関灯台の上部から激流の高島を遠望する